

コールバーグ理論の進化と日本の道德教育

金信光紀（人間学コース）

（指導教員：堂園俊彦）

キーワード：コールバーグ、道德性の発達段階、道德教育

序論

1958年から続けられてきた「道德の時間」としての日本の道德教育は、いじめ問題の深刻化を受け、2015年の学習指導要領の改訂を機に、「特別の教科 道德」となった。大きく変わった部分としては「考え、議論する道德」への質的転換という点がある。今回は、この「考え、議論する道德」への移行に影響を与えた、ローレンス・コールバーグによる道德性の発達理論を中心に扱っていく。コールバーグが論文を発表した当初、多くの批判が寄せられ、それに応答する形で理論が進化していったという流れがあるが、ここでは彼が論文を発表した当初の理論を前期、批判に応答して修正された理論を後期とし、その応答の妥当性を検討することで「考え、議論する道德」の内容を考察することを目的とする。

第1章 コールバーグの初期理論

第1節 前期コールバーグ理論の背景

コールバーグの道德性発達理論の背景には、ジョン・デューイの影響がある。デューイは道德性の発達には三つの段階があることを自明のことと仮定していた。それらのレベルには行動原理の違いがあり、生物的な衝動が行動を決定づけるレベルから、目的が善であるかどうかは行動原理となるレベルまで発達するとされている。

また、ピアジェも、コールバーグ理論に影響を及ぼした。彼は子どもの道德的発達に三つの段階を見出した。それらもデューイの理論同様、行動原理の違いで区別されている。コールバーグはピアジェの理論について、ピアジェ自身が提示した発達段階の基準に合致していないことを問題として挙げ、自ら発達段階を定義していくことになる。その際に彼は、発達段階の基準を設定している。その中には、後退や段階の飛躍が無いように発達が進行すること、常に到達している最高の段階での思考を好むことなどが含まれる。コールバーグの六段階の発達段階理論は、デューイらのような既存の道德性の発達段階を統合、細分化した構造となっている。

第2節 前期コールバーグの研究手法

コールバーグはピアジェと同様、認知発達のアプローチを基礎として研究を進めていった。認知発達のアプローチとは、ピアジェの示した子どもの発達理論、すなわち有機体の発達

に関する相互作用説に裏打ちされた認知発達論に基づくアプローチのことを指す。しかし、同じ手法を用いつつも、コールバーグの手法は、ピアジェのものとは異なり、より複雑で、多様な解釈の余地がある葛藤場面を仮定し、それについて質問することで被験者の道德性の発達段階を見極めようとするものだった。その葛藤場面の例として最も有名なものが「ハインツのジレンマ」である。

第3節 前期コールバーグ理論の概要

コールバーグによる道德性の発達は六段階からなるが、これらはデューイと同様に三つのレベルに区分される。最も下位は「慣習以前のレベル」であり、第一、第二段階はここに含まれる。第一段階の子どもは行動原理が最も単純であり、罰の回避と力への絶対的服従が価値あることとされている。第二段階では、子どもは正しい行為とは自分自身の必要と、ときに他者の必要を満たすことに役立つ行為だと考えたとされている。二つ目は、「慣習的レベル」である。このレベルにも二つの段階が含まれる。第三段階では、善い行動とは、人を喜ばせ、人を助け、また人から承認されるもののことを指すとされる。第四段階では、権威や定められた規則、社会秩序の維持といったものへの志向が見られるようになり、この段階での正しい行動とは、自分の責務を果たし、既存の社会秩序を、秩序そのもののために維持することだとされている。最後のレベルが、「自律的、原理的レベル」である。このレベルも二つの段階に区分される。第五段階での正しい行為は、一般的な個人の権利や、社会全体によって批判的に吟味され、合意された基準、つまり「最大多数の最大幸福」に基づいて規定される。第六段階では、正しさとは、論理的包括性、普遍性、一貫性に訴えて自ら選択した倫理的原理に一致する良心の決定によって規定される。法律や社会的合意はそれが自らの道德原理に従っている場合には守らねばならず、法律が道德原理に反している場合は道德原理の方が優先される。しかし自らの行為を自ら規定した道德原理に従って決定したとしても、集団や社会への反逆や崩壊といったものには繋がらないとされている。

第2章 前期理論に対する批判

第1節 C・ギリガンによる批判

本要旨は、『2023年度 静岡大学人文社会科学部 卒業論文要旨集』第20号に掲載されたものを、著者の許可を得て掲載するものである。許可なく転載することを禁止する。

コールバーグが発表した道徳性の発達理論については直近の弟子であるギリガンからも批判があった。ギリガンの問題提起の中心は、道徳性の発達には、男性的な「公正さの道徳」の他にも、女性的な「配慮と責任の道徳」が存在するにもかかわらず、コールバーグは前者のみを重視し、後者を無視したことであった。この二つの違いは世界の構築の仕方に起因する。男性は他者から独立することを目指す、女性は他者への共感や同情を重視し、個人的な人間関係の中で生きるとされている。このような考えから、コールバーグの理論を男性的なものであると批判し、また彼の研究に用いられた仮説の葛藤場面である「ハインツのジレンマ」や、研究で用いられたスコアリング方法にも性差のバイアスがかかっているとされた。

第2節 M・マーフィーとC・ギリガンの批判

マーフィーとギリガンは、共同で行った研究において、コールバーグの道徳性の発達段階理論を適用すれば成人期初期に発達の退行現象が見られるが、彼女らが提示する新たなコンテキスト相対主義という考え方を適用すればその現象は発達として扱えられると主張した。行為者ごとの相対的なものしか存在しないという考えを退行と見なすのではなく、人が持つ知識そのものがコンテキストに沿った相対的なものであるために普遍的原理の妥当性が疑問視される流れを当然のことと評価して発達と見なすようにしたのである。

第3節 ハーバーマスの批判

ハーバーマスの批判は、討議的行為、コミュニケーション行為が十分考慮されていないというものである。ハーバーマスにとってコミュニケーション能力を運用することは、自我アイデンティティの発達にも大きく関与し、道徳性の発達にとっても重要なものである。しかしコールバーグは自身の発達理論の最終段階である第六段階では、モノローグ的作業、つまり個人の中での作業が中心になっていることから、ハーバーマスの批判の対象となったのである。ハーバーマスは独自にダイアログ的作業、「共同で従う手続き」を組み込んだ第七段階を提唱した。

第3章 コールバーグの後期理論

第1節 ギリガンの批判への回答

コールバーグがギリガンの批判の中で最も重大と考えたのは、道徳的ジレンマやスコアリング体系には性差に関するバイアスが組み込まれており、そのため女性の回答が低く評定されているという点だった。しかしコールバーグは、男女両方を対象とした研究結果の分析に基づき、スコアリング結果に性差が見られないこと、また男性もギリガンが女性的とした配慮と責任の道徳を用いることから、公正の道徳に基づくスコアリング方法に妥当性が無いという批判を退けた。

第2節 M・マーフィーとC・ギリガンの批判への回答

コールバーグはそもそも、マーフィーらの批判には根本的

な欠陥があったとした。長期的な研究を行う際には誤差を念頭に置いて分析を進めねばならないが、マーフィーらの研究ではそれが行われていないというのである。よって退行が実際に起こったとは結論付けられないとした。またコンテキスト相対主義は、自らの理論に相反するものではなく、むしろ合致するものであり、状況に応じて行動を選択することは退行とは呼べないとして批判を退けた。

第3節 ハーバーマスの批判への回答

コールバーグはモノローグ的な第六段階で終結しているというハーバーマスの批判に対し、「道徳的椅子取りゲーム」という概念を導入し、理論を修正することで対応した。この概念は葛藤場面に参加するすべての人の欲求を最大限実現するために、吟味、議論を繰り返すというものであり、ハーバーマスの考え方にも合致する。実際、コールバーグは、思考実験によって研究を進めている中では気付かなかったが、現実の葛藤場面ではダイアログの過程は必須であることを認めている。

結び

批判に対するコールバーグの回答は、適切なものであったと考えられる。そもそも性別で区別するというギリガンの考えは、普遍性を追求したコールバーグの考えとはそもそも相容れないものであり、またハーバーマスの批判を受けて修正された理論を見てみれば、そこには各人の要求をバランスよく実現しようと探る姿があり、これこそが配慮と呼ぶべきものとも考えられたからである。さらに、ギリガンの批判に関しては、個別の人間関係の中で配慮と責任の道徳を適用しようとするのは、道徳原理として範囲に制限を付けるということであり、違和感を覚える。

コールバーグの理論は批判を受け、進化していった。読み物教材中心のモノローグ的作業から、「考え、議論する道徳」への転換は、コールバーグ理論の進化の軌跡と重なり、その進化の結果を見れば、今後の道徳教育もますます発展することが期待できる。教員側の優秀な人材育成などの課題はあるが、これからの進歩に注目していきたい。

主な参考文献

- ・ L.コールバーグ著、永野重史訳、1987a、『道徳性の形成-認知発達のアプローチ-』、新曜社
- ・ L.コールバーグ著、岩佐信道訳、1987b、『道徳性の発達と道徳教育』、広池学園出版部
- ・ L.コールバーグ・C.レバイン・A.ヒューアー著、片瀬一男・高橋征仁訳、1992、『道徳性の発達段階-コールバーグ理論をめぐる論争への回答-』、新曜社